

特集

巻頭言

自立した学習者を育てる

「自立した学習者」を育てる学校・授業のあり方 北 俊夫 2

自立的な学習者の育成のために、どこまで子どもにゆだねるか

「『自立』のために必要な支援・指導」 中谷素之 8

「自立した学習者」を育てる授業のアイデア

「やったらできた」の自己肯定感が、進んで学ぶ生徒をつくる 山崎茂雄 11

自立的な学習者に求められる、「上手な頭の働かせ方」(学習方略) 植阪友理 14

自律した学習者を育てるー子どもと教師でつくる「学びのものさし」 鈴木 聡 17

自己調整学習の基礎を育てる学び方の指導 池之上義宏 20

自立的な学習者を育てる学級経営 阿部隆幸 24

「自立した学習者」を育てる発達支持的生徒指導の視点 大畑祐司 27

認知処理様式を考慮した「自立学習」の促進 熊谷恵子 30

UDLで学びのエキスパートを育てる 國嶋朝生 33

ピアフィードバック(相互評価)で自立的な学習者を育てる 河村茂雄 36

特集

自立した学習者を育てる

「自立した学習者」を育てる授業のアイデア

「やったらできた」の自己肯定感が、進んで学ぶ生徒をつくる

東京都立高等学校非常勤教員
学校心理士スーパーバイザー

やまざき しげお
山崎 茂雄

要 旨

★「自立した学習者」育成のヒントとして、筆者が工夫してきた「生徒の頭が働き、学ぶ喜びを実感できる」アイデアを紹介する。①不登校生のための高校で実践した、習得学習を自力で進めるスキル教育の授業。②生徒自身が小説や論説文に区切り線を入れ、自力で読解していける技法。これらの方法論は、生徒自身の気づきを重視している。「やったらできた」喜びは自己肯定感となり、生徒を成長させる。

1 「自立した学習者」を育てるには

今「自立した学習者」が求められるのは、「自力で学べない」生徒が多いからだろう。

私が勤務する都立普通科高校でも、漢字ドリルを宿題にして小テストをすると、大半の生徒が学習して来ず、得点できない。高校間格差の底辺にある学校とはいえ、まじめなのに自学自習できない生徒は増えている、と感

じる。

私は四十年以上、都立高校の国語科教員を勤め、再任用期間を終えた今も教壇に立ちつづけている。夜間の定時制高校からスタートし、教室で取り残されてきた生徒たちが、どうしたら学習の楽しさを味わえるか、という問題意識で授業づくりに取り組んできた。

学習の遅れのある生徒たちに対して、単純にレベルを下げて丸暗記させる先生がいるが、それは違うだろうと当初から考えていた。

私が目指したのは、文章読解や基礎知識の習得学習において生徒自身の頭が働き、「できた」「わかった」という「学ぶことの喜び」を実感できる授業である。そのために、さまざまな授業の工夫を試行錯誤しつづけた。

私が実践のモデルにしたのは、既存の授業ではなく、「体験的な気づき」を重視する心理学のワークシoppや、「KJ法」などの発想法、「速読」「記憶術」「イメージトレーニング」など、自己啓発系の技法だった。大学院

研修の機会を得て、教授学習の心理学を学んだこともさまざまなアイデアにつながった。

その後、都立のチャレンジスクール（不登校生などのための昼夜間定時制高校）で、人間関係スキルと学習スキルを教える学校設定科目「コピーング」の開発にたずさわった。

その中で、学習スキルの「メソッドタイム」は、習得学習のやり方など、授業で役立つスキルを学ぶ科目である。これはのちに、拙著『学習スキルアップ・ワークシート』（学事出版）としてまとめられた。

ここで取り上げた学習スキルは、本来中学校で身につけるはずだが、その機会を逃した不登校生たちに、それを補うものと当時は考えられた。しかし、今、実際に起こっているのは、そうした学習方法を多くの生徒が身につけないまま、中学校、高校の教室で過ごしているのではないか、という問題である。

そこで、同著の一部を紹介して、「自立した学習者」の育成につながるヒントを考えたい。

2 「自ら学ぶスキル」を教える

(1) 記憶のスキル 三回授業

漢字や英単語を覚えるなどの習得学習で、①声に出し、②手で書き、③意味を考える、という「覚え方」と、答えを隠してやってみて、できないものをくり返し覚えるという「学習の進め方」、さらに「復習」の効果を実感できるワークで構成した。

実際の練習問題は、教科成績で差が出ないよう雑学クイズ的なものにし、時間内に覚える問題数を自分で選べるなど、一斉授業で実施できるように配慮している。

(2) チェックペン活用法 三回授業

「チェックペン」は文具メーカーゼブラの登録商標だが、一般的には「暗記ペン」と呼ばれる。穴埋めプリントなどに答えを書く「ペンタイプ」もあるが、ここでは「塗るタイプ」の使い方をステップアップで学ぶ。

例えば「抗生物質の開発」を「 」の開発」と塗らず、「 物質の開発」とヒントを残して塗り、覚えたらヒントも塗りつぶすなど、「スモールステップ」を自ら考えて覚えていく。

これは前項の「記憶のスキル」を文脈の中で使い、学習していく方法である。説明文を問いと答えの関係で読み解き、自学自習していくコツを身につけることをねらいとした。

(3) 簡条書きトレーニング 三回授業

これは、社会科や理科などの教科書を読むことの練習である。教科書の本文を模した事項列挙型の説明文（直線的な記述）を、簡条書き（二次元配置）に書き直す。

要約を必要としない形で教材を作り、それを単純なものから複雑な階層構造のある文章へと、ステップアップして練習していく。

これは、教科書を読み、授業を聞いて要点をノートにまとめるなどの学習行動の基礎となる。

3 自力で読むための方法論

また、国語授業の中で「自力で読む」力を伸ばすために工夫した方法がある。これらも参考になると思われるので紹介しておきたい。

(1) カットイメーজ読解法

小説を読む楽しさを実感できる方法として考案したのが、「カットイメージ読解法」である。小説とは、記述された物語である。読み手はことばから場面を想像し、イメージを通じて物語の展開を楽しみ、人物の心情を感じとる。

ふだんから小説を読む人はそれを無意識に行っているが、読み慣れていない人はよくわからない。そこで、イメージして読むことを体験する手がかりが「カットイメージ」である。

例えば「この小説をマンガにしたら、どうなるか」と考えて読んだとき、心に浮かぶ一

コマ一コマのマンガ（あるいは映像のカット）のようなものを、「カットイメージ」と名づけた。そして、①カットイメージを意識して本文を注意深く読み、カットの切れ目で本文に区切り線を入れていく。次に、②物語をより少ない数の画（例えば、紙芝居のような代表面）で想像し、大きな区切りを本文中に見つけていく。この二段階が基本作業である。

そのイメージを互いに語りあう展開も楽しいが、それをせずに一般的な読解学習に進んでも、手ごたえは大きい。全員の理解レベルが確実に底上げされているからである。ふだん国語が苦手な生徒もこの作業には熱心に取り組み、自分なりの考えを言う様子が観察された。

これは都民のための公開講座などを通じて大人にも好評で、一般書の出版にもつながった。「映画を観ているみたいに小説が読める超簡単！ イメージ読書術」みらいパブリッシング。教員向けの本ではないが、この読解法自体を体験できるので、参考にはなると思う。

(2) 鳥瞰読解トレーニング

また、論理的文章を読むためには「鳥瞰読解トレーニング」を考案し、授業で実践してきた。その手順は、①「事実」と「意見」を区別して「事実」を囲む。②「意見」の部分から「主題文（主張）」を探し、傍線を引く。主題文候補は何か所か引いてよく、事実との関係を見ながら最終的に絞り込み、主張を

見つける。新聞の社説を教材にするときれいにでき、生徒にも「わかった」実感が得られやすい。

これは具体と抽象を行き来する論理的文章の共通構造に着目した読解ステップである。事実か意見かというもののさしで文章を区分けし、筆者の主張を見つけていく。要旨をつかむ力がつくだけでなく、事実と意見を区別して情報を吟味する情報リテラシーの感覚も磨かれる。

しかし、国語教科書所載の「評論」では、筆者の主観が色濃く、事実と意見の区別も曖昧なことが多い。そこで私の授業では「具体例」を囲む作業で、何とか評論を読ませているが、生徒たちの反応はいまひとつである。

社会で役立つ読解力とは何かと考えると、教科書や入試問題で、作者の主観が強い「評論」が主流であることには疑問を感じる。

なお「鳥瞰読解トレーニング」は、要望があれば研修会を開いてお伝えしている。

4 「気づき」をもたらす授業

勤務校では若手の先生方の授業を見る機会が多いが、「理解させよう」として一生懸命説明している。するとどうしても長くなり、生徒が能動的に学ぶ時間は減る。また、説明してわからせたことを忘れないように「覚える」ことを求める。けっきょく生徒は、教えられ

たことを暗記する学習にならざるを得ない。

そのため「アクティブラーニング」が提唱されたわけだが、若手の先生方でもそうであるから、現場はあまり変わっていないようだ。

それに対して私が追求してきたのは、生徒の頭の中が「アクティブ」になるよう、彼らの中に「気づき」を起こすことである。

例えば鳥瞰読解トレーニングでは、従来の読解指導のように接続詞による文章展開や全文構成の把握を重視しない。事実を囲み、文章の区画整理をしながら主題文を探していくと、生徒自身の中に「これが主題文だ！」という気づきが起る。それをもたらすことが私のねらいである。

それこそが、私たちが文章を読むときの自然な理解の働きであり、そこに自ら「わかった」という喜びがある。教師の説明による理解と、この喜びとの違いは決定的である。

勉強ができる子であった先生方は、生徒がなぜ勉強ができるのかかわからず、自分がなぜ勉強ができるのかもよく考えていないのだと思う。しかし、私のアイデアの多くは、自分が無意識にやっている内的なプロセスを分析し、それをどうやって生徒に学ばせるか、と考えることから生まれてきた。内省して見つけたメカニズムを「教える」のではなく、体験させ、実感させ、身につけさせる方法を考える。それが、本稿で紹介した教授・学習方法なのである。

さらに、「やったらできた」を体験させるために私が意識したのは、①自発行動、②スモールステップ、③即時フィードバック、という行動主義の学習理論である。取り組むとすぐ結果が出て、成功体験が得られる。すると、このサイクルがどんどん回っていき、生徒は進んで学習に取り組むようになる。前時代的と言われがちな行動主義だが、生徒が自力で学習を進めていくうえでは、この原理に気づかせることも大切だと思う。

むすび

本稿では、「自立した学習者」として「自分の力で習得学習や読解学習を進められる人」を育てるためのヒントを考えてきた。

もちろん、必要に応じて他者に支援を求めたり、ペアやチームで協力したりする能力も「自立した学習者」の必要要件だが、まずは自分で学習を進められることがベースとなる。

自分の力で「やったらできた」喜びは、自己肯定感の源であり、それが人を成長させる。学校の勉強はその契機なのだと考える。

この他にも多くの実践を、私のウェブサイト「教育エジソン」で紹介しています。日本教育新聞に連載したシリーズ『学びに向かう意欲を育む』もお読みいただけます。



※「教育エジソン」

<https://www.ed-ed.net/>